

四谷の

千枚田だより



第158号

二、三日の天気続きに無理をして脱穀した百姓に聞いたと

収穫の秋

振り返って・各地で渇水と騒がれていたが、四谷の千枚田は秀峰鞍掛山の恩恵を受けた湧き水がすべての田んぼを潤しているおかげで何とか渇水は免れた。世間では猛暑と騒がれバカ熱い夏で、生育中期の出穂頃までは水も温み、いっぴくなく作柄もよく、棚田の百姓は豊作を当て込んだ自慢げな話が飛び交ったのもつかの間、今年は台風もなく、このままだと大豊作を誰しもほくそ笑んでいたが、次々と発生する台風の影響から雨日が多く、また、水源が湧き水のため、田んぼの水も温まらず「いもち病(冷えいもち)」の発生が見られた。稲刈りも早い日は九月早々に刈りだしたが好天の日が続かず四十日も経った今でも刈り取りが終らない始末だ。また、長日のはざかけや濡れた稲をはざ干ししても乾燥する日がなく、稲穂が生えて(実から芽が出る)しまい、「こんな年もないが・・・」と言いがらも保全意欲を失せかけている。

【獣害について】
冬耕の時期からニホンジカが田んぼを運動場代わりに飛び回る姿が目視され、早苗をバリカンで刈ったぐらいきれいに食べ、イノシシはほとんどが沢伝いに田んぼに侵入、ヌタを打ったり、はざかけの稲を引っっこ抜くなど、悪態三昧を仕出かしている。(怪我を顧みず、今もって爆竹で威嚇している)特に、千枚田の中でも一番景観に優れている佐賀前の小田んぼで街場の住人が憧れだけで耕作志望。周囲の百姓と歩調が取れず、身勝手な晩秋の霜が降りてもはざかけの状態に収穫ゼロ、其処へイノシシが付いてしまい、放棄状態の田んぼに陥った。味を占め、学習能力の優れたイノシシが土地勘を頼りに放棄地周辺の真面目な百姓の田んぼに夜な夜な出没、大きな被害を被った。そんなこんなの中、今日も、観光客が楽しそうに「癒される」と大勢訪れている。



敬老会

九月十五日、公民館主催の敬老会が開催された。



敬老会は八十歳が一年生で本日の出席者は三十名であった。連谷地区は百余戸と少数集落であるが、写真で見た通り生気澁刺な器量と知恵者揃いであり、その何人かが棚田の現役百姓である。毎年、敬老会の記念写真は(舜)が撮り、提供を重ねている。その代り、いろいろ知恵を貸して頂いている。

稲刈り

九月十五日、豊橋調理製菓専門学校の稲刈りが行われた。生徒たちは田植えから脱穀までの一連の農作業を通し、お米の大切さを学んでいる。生長調査の結果、粳米は二本植で一株二十三本の分枝、一一〇粒。糯米は四本植で二十三本と分枝が少ないことを学んだ。



九月十七日、新城高校農業クラブの稲刈りが原田英史理事の指導で行われた。同校は育農の一環として四谷の千枚田を圃場として学んでいる。収穫した新米は学校行事等で試食・販売も行っている。

稲刈り

九月二十二日、愛知東こども農学校は稲刈りの予定であったが、あいにくの雨のため、連谷小体育館を会場に親子で「おはぎ」などを作り楽しんだ。

十月四日、鳳来寺小学校は雨天で延びていた稲刈りを行った。子供たちは千枚田へ来たたくて来たたくて、先生も「せがまれて」大変だったそう。当日の稲刈りは晴れ間をみて急遽決り(舜)は他用でお相手できなく残念であったが、写真を見て、子供たちの野外自然体験学習の楽しさが目に見え、ほっとしている。



視察

九月二十八日、高槻市土地改良区二十五名の視察対応を新城市鳳来総合支所地域整備課を窓口に行った。耕作規模も漫画ほどの違いはあるものの、同じ百姓に変わりはなく、両者、熱の籠った質疑応答がなされた。高槻市は都市化、工場化に拍車がかかり、ウハウハの農家もあり、歯止めが難儀のようでもある。



行 平成二十八年十月二十日
鞍掛山麓千枚田保存会
発 文 責 小山舜二